

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	オウ ヨウ WANG Yang		授与番号 甲 1472 号
学位の種類	博士( 文学 )	授与年月日	2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]		
博士論文の題名	〈1919～1945〉日本男性作家に築き上げられた中国女性像 ——ジェンダー・主体性・ポストコロニアリズム		
審査委員	(主査)中川成美 (立命館大学文学部特任教授)		瀧本和成 (立命館大学文学部教授)
	竹松良明 (元大阪学院大学短期大学部経営 実務科教授)		
論文内容の要旨	<p><b>【論文の構成】</b></p> <p>本論文は序章と終章、および全四章十一節で構成される、一九一九年から一九四五年前後までに発表され、かつこの期間をテキスト内の背景にした、「中国体験」を持つ日本人男性作家の小説における中国人女性像およびその発展や変容を、ジェンダー、ポストコロニアリズム、比較文学理論にて、複眼的に考察したものである。</p> <p><b>【論文内容の要旨】</b></p> <p>第 1 章「古典・欧米・娼婦——『東洋趣味』者の猥奇と想像」では、漢文学、欧米文学に深い造詣をもった谷崎潤一郎と芥川龍之介を取り上げ、その作品から見る中国女性像の表象を考察する。第 1 節「絡み合う漢詩文とエドガー・アラン・ポー——谷崎潤一郎『西湖の月』における酈小姐像を手がかりに」で、谷崎潤一郎「西湖の月」の「酈小姐」イメージの形成に西湖関連の漢詩文が大きく影響しているものの、「酈小姐」の「病的な美」の背後にエドガー・アラン・ポーの方法（論）が機能していると指摘した。そのうえで、「美女の死」というテーマに「永久性」を加味することにより、谷崎が「酈小姐」と「蘇小小」の早世を一体化させたいと、ポーの文学的方法や漢詩文の言説をテキストの結末で統合、そして調和させようとしていると論じている。谷崎の中国女性イメージの中核的部分に、ポーの方法が漢詩文を凌駕して介在していたことを明らかにし、またそこに胚胎する谷崎の男性優位的な視線のありさまを指摘した。第 2 節「『宋金花』像からみた重層的対立性をめぐって——芥川龍之介『南京の基督』論」では、中国に行く前の芥川龍之介が谷崎潤一郎の中国旅行に触発され創作した「南京の基督」にある「宋金花」像における重層的対立構図に着目している。谷崎の「秦淮の夜」から、芥川は可憐な娼婦に同情する「買春する日本知識人」／「売春する中国娼婦」という構図を受け継ぎ「南京の基督」に取り込んだと指摘する。この構図はさらに運動的・能動的／静止的・受動的、消費／被消費、超越的／内在的という重層的な二項対立に拡充されていき、こうした重層的対立を成立させ、芥川を欧米・日本・中国の三者間の衝突を観察するための媒介として措定している。第 3 節「芥川龍之介『奇怪な再会』論—日清戦</p>		

争・近代化を背景にした〈狂女〉の生成」では、芥川「奇怪な再会」における「お蓮」という主人公を取り上げ、彼女からみた母語中国語の無効化、アイデンティティの混乱や被抑圧について分析している。日本の近代化発展の需要に密接に絡んでいる日清戦争は、敗戦したヒロインの母国（清国）を弱体化させたのに反し、戦勝国である日本は近代化の土台を固めることになった。そのうえで、日清戦争後の近代化の急速成長に乗じようとする帝国男性に消費・圧迫されつつ、ヒロインは〈野性〉の蘇生をきっかけに〈狂女〉に逸脱し、近代化から篩い落された存在となり、最後に脳病院に収容されるに至った。日清戦争期に軽工業を、日露戦争期に重化学工業を発達させた日本の近代化への困惑と懐疑を抱かずにはいられなかった芥川について考察を加えている。

第2章「都市・自覚・革命——旅行者の観察と体験」では、中国の旅行体験を持つ日本人男性作家が創作した、中国都市を舞台とする小説における中国女性像を分析している。第1節「激動する一九二〇年代を生きる中国女性像——芥川龍之介『湖南の扇』論」では、一九二一年、中国に初めて足を運んだ芥川龍之介は、女傑秋瑾や五四運動以来活躍していた進歩的な女学生から、大官に関わる高級妓女に至るまでの各階層の中国女性を通じて、女性たちの新思想を発見するに至った。芥川は「玉蘭」と「含芳」という二人の湖南女性像が伝統美と時代が要請する進歩性を兼備することにより、都市長沙の政治的・文化的表象と一体化していることを指摘している。第2節「『芳秋蘭』の虚と実——横光利一『上海』における女性共産党員をめぐる」で、まず、横光利一のエッセイを通して、横光は芥川が関心を寄せたものの書かずじまいだった上海の革命都市としての一面を「芳秋蘭」という中国女性共産党員に映し出していることを明らかにしている。『上海』の典拠や同時期の関連資料を調査、分析したことで、横光が『上海』の創作にあたり収集してきた豊富な関連資料や知人からの情報により、一九二〇年代に活躍していた中国の女性党員に注目するようになったと言及した。革命者「芳秋蘭」像からみたメロドラマ的な恋愛にある虚構性が否めないにもかかわらず、そうしたデフォルメは一方においてプロレタリア文学に定着した「恋愛と革命」の図式化に対する横光利一の対抗意識によるアンチテーゼであったと読み取っている。第3節「〈北京〉の女性像・女性的北京像における二重性——阿部知二『北京』を中心に」においては、阿部知二『北京』におけるチャイニーズ・ヒロインに両立する頹廢性と政治性、革命意識について論じている。阿部知二は初めての北京行で見聞した「美しいもの」と感受させられた「不穩の氣」を、萬寿山の祠で遭遇した女性像の両義性により表象し、さらに『北京』及び「王家の鏡」における中国女性像の二重性を通して浮き彫りにしようとしたと解釈している。一方において、阿部知二が初めて北京に赴いた時期は日本国内の言論統制が著しく強化された時代だが、こうした抑圧的な雰囲気こそ、「不穩の氣」と「美しいもの」を「練り合わせて、文章をなすこと」の困難の所在があり、『北京』のエキゾチシズムの背後に、時局に対する阿部知二の憂慮が見え隠れしていると結論付けた。

第3章「暴力・〈姑娘〉・『女兵』——従軍者の記録と歪曲」では、戦時下の中国戦場に従軍していた男性作家が各自の従軍経験に基づいて書き上げた小説における中国女性イメージを取り扱っている。第1節において、石川達三『生きてゐる兵隊』、火野葦平『花と兵隊』、上田広「黄塵」や「鮑慶郷」における「姑娘」像をそれぞれ再検証している。『生きてゐる兵隊』にある性暴力や虐殺の被害者としての「姑娘」イメージを指摘

し、火野葦平や上田広の戦時下小説に登場する「姑娘」イメージを捉え直すことで、『生きてゐる兵隊』以降の戦地小説において中国人女性像の描かれ方の方向的転換を検証した。第2節「挟撃される〈身体〉——田村泰次郎『肉体の悪魔』と丁玲文学における女性党员を比較して」では、田村泰次郎「肉体の悪魔」と中国女性作家丁玲「再会」、「霞村にいた時」に描かれる女性党员像の性格の異同を比較しつつ考察が加えられている。女性共産党员の〈身体〉の境遇性或いは体験を基軸に、田村泰次郎「肉体の悪魔」と丁玲「再会」、「霞村にいた時」とは同一線上にあり、重なり合いながら相互補完的なテキストとしてであると分析した。第3節「女性視点による中国「女傑」——武田泰淳『廬州風景』論」で、武田泰淳「廬州風景」における「楊さん」イメージから中国の小説にある侠女像や女兵兼作家である謝冰瑩の投影を読み取ったうえで、作者の〈脱女性化〉の手法と試みを指摘した。さらに、それまでの戦争文学と比して、「廬州風景」の独自性は「楊さん」の強靱な有り様を「脱女性化」の手法で「強化」し描出したと同時に、日本人の女性を視点人物にすることによって、男性の視点人物（とりわけ兵隊の場合など）の設定に内包される危険性を弱化しようとしたうえに、女性の視点から「男性性」と「女性性」の境目を曖昧にしたと論じる。そのうえで、戦時下の戦争文学に定着するようになっていた「日本兵隊（視点人物）」／「中国人女性（登場人物）」の構図にある権力関係の非対称性がある程度まで解消するようになったと指摘している。

第4章『『新女性』・Shanghai・〈脱構築〉——居留者の回想と展望』では太平洋戦争勃発前後から終戦まで上海に滞在し、「居留」していた阿部知二と武田泰淳の〈上海もの〉を考察している。第1節「阿部知二の〈上海もの〉における『新女性』—関露・田村俊子との関連性を手がかりに一」では、阿部知二「緑衣」における「李岬」像と「陸軍宿舎」の「曹小姐」像に着目、阿部知二のエッセイ「支那女性グリンプス」において、彼が昔北京で遭遇した中国女性に受けた強烈な印象は、日本遊学時代の「沈明華」に大きな影を落としたことを確認したうえで、第二章で取り上げた『北京』と「緑衣」の女性人物とが接合されていることが明らかにされる。これを素地の一つに、「沈明華」は「放浪し」つづけてきた過去の自分を切り捨て、「待ち遠しい」平和に向けて行動しようとする信念によって、革命精神を備える「李岬」に生まれ変わったのである。この生まれ変わった「李岬」の性格から、田村俊子を編集長とする中国語雑誌『女声』の主旨との呼応性や、〈両性具有〉の方法の試みを読み取っている。一方において、「李岬」と同劇団で舞台装置に従事した「曹小姐」は、雑誌『女声』の編集者でもあった中国の女性作家関露をモデルにして造型されており、「李岬」と異なる形で社会進出に成功し、平和のために貢献することになった。それは、ある意味で日清戦争以降男性作家の数多くが築き上げてきた紋切り型の中国女性イメージにある機械性や形骸化に対する阿部知二なりの改善策であったと指摘している。第2節「武田泰淳の上海女性イメージにおける〈混血性〉——『閻姑娘』から『陸淑華』へ」において、武田とともに中日文化協会に働いていた給仕をモデルにした敬虔な天主教徒「閻姑娘」のアイデンティティにおける宗教が性別・民族・国籍に優先されるという認識原理を浮きあがらせている。こうした認識原理により、中国人「閻姑娘」／日本人「杉」の対立構図は一時的に後景化することになった。宗教にすぎず戦争の苦難を乗り切ろうとする「閻姑娘」像は、多元文化の坩堝である上海において中外文化の融合・衝突の一形態の具象化だと指摘した。

	<p>本論文はこのように第一次大戦終結から第二次大戦終結までという戦間期、および戦時下の日本人男性作家の中国女性像への視点を、文学作品から探求しようとする極めて意欲的な構想を持つものである。そうした日本人男性作家の合わせ鏡として、中国女性作家を拮抗させて、奥行きのある研究となっていることを特に申し添えておきたい。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl;">論文審査の結果の要旨</p>	<p><b>【論文の特徴】</b></p> <p>本論文は従来の日本文学において取り込まれてきた中国女性像のみならず、等閑視されてきた中国女性像という問題を、第一次大戦と第二次大戦の戦間期に著わされた膨大な日本人男性作家の作品から抽出して、考察したものである。広範なジェンダー理論やポストコロニアリズム理論、比較文学理論の有機的な応用によって、中国女性像の屈折かつ変貌してきた過程を、総合的に分析した点に、本論文の優れた達成がある。日本男性作家の中国女性認識というだけにとどまらず、豊富な中国側の史料や文学との比較によって、これまでの研究とは異なる角度から、中国の女性運動や女性史を相対化して補足することとなったのも、本論文の成果である。個々の作家の中国体験と、その作品研究は既に膨大に存するが、戦間期というスパンで考察しようとした総合的なものは新しく、今後の学問的発展においても期待される優れた論文である。</p> <p><b>【論文の評価】</b></p> <p>これまで個々の作家研究、或いは作品研究として日本文学研究の領域にとどめられてきた日本人男性作家から見る「中国女性像」の推移と変遷を、谷崎潤一郎、芥川龍之介、横光利一、阿部知二、石川達三、上田広、田村泰次郎、火野葦平、武田泰淳の中国関連作品から抽出して、その系譜と連関性、および対称性を考察したものとして、審査にあたった主査、副査は高く評価した。それは単純に言説を整理したのではなく、偏見や蔑視、あるいは理想化などの欲望が、いったいどのような理由をもって構成されていったかについて追及していることが、本論文の質を保証していると言い換えることができる。その背景をなす激動期の中日の歴史が、そこには勿論重ね合わせられるのであるが、旅行者からルポルタージュ者、そして兵士や従軍記者に変貌していく日本人作家の変遷を彼らが残した叙述のなかから再構築して、なお中国人女性作家の視線を重ね合わせていく論述は、説得力に富む本文を達成したと評価したい。</p> <p>そのうえで、本論文に付け加えてもらいたいのは、近代化過程のなかでの国民国家の問題である。すなわち、戦時に至る中日関係の行程で、本論文で展開する「まなざし」の交換が、どのような意味を持って国民国家の前に立ちだかつたかについての考察が加われば、大変興味深いこととなったと考える。ただし、これは今後の王氏の研究によって明らかにされることと期待する。本論文は全体として戦前期中国における日本人男性作家が描いた中国女性像という、ジェンダー論として読み取る上ではかなりの困難が予想される材料を果敢に選択し、作品論の展開に当っては一貫してジェンダー論的視程を堅持することで、ここに扱われている戦時下の作品の研究領域に新たな可能性を示唆した点が秀逸であり、博士号取得に値する論文であると、審査員一同評価した。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が</p>

	<p>本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
<p>試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公開審査は二〇二〇年一二月一〇日(木)午後六時三〇分から八時三〇分まで、清心館004教室で行われた。審査委員は主査・中川成美、副査・瀧本和成、竹松良明の三名であった。なお、コロナ禍にあり、公開審査は一部オンラインが併用された。公開審査の質疑応答において、論文に関する申請者の応答は的確であり、過不足なかった。また本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程(日本文学専修)の在学期間中における主要学会誌への論文発表、海外を含む学会発表などの様々な研究活動、また中国における学会活動、および高い英語能力を用いて論文発表を活発に行い、中国側の資料の積極的な日本語にもその能力を示した。博士学位に相応しい能力を有することを確認した。</p> <p>よって、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することが適当であると判断する。</p>